

特集 占い

年の暮れは、一年の出来事を振り返る一方で、来年の運勢が気になる時期。日々の行動から人生の節目の重大な選択にいたるまでのさまざまな場面で、幸せを探索する手段として、人は占いに頼る。占いを担う人びと、占いの道具、占いのコマロジは千差万別でも、占いに託す思い、それを信じる心は人類に共通するのかもしれない

「文昌陣」で学問の気運を強める(中国) (撮影・韓敏)



占鈴が埋納されている鈴塚(蜂田神社) (撮影・近藤雅樹)



グアテマラの呪術師の持ち物。袋の中には占いに使う豆が入っている (撮影・羽幹昌弘)



イラン、テヘラン州シャフレ・レイ郡の聖廟 (撮影・清水直美)



晴れて呪術師となり免状を渡す(グアテマラ) (撮影・羽幹昌弘)



運を占い、人生を切り開く 中国のある人気占い師

韓敏

民博 民族社会研究部

専攻は文化人類学。二〇世紀の中国革命を歴史過程として、また文化システムとして研究している。近刊に『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』(編著書・風響社)がある。

中国人の人生観は現世利益の追求にある。すなわち、健康、出世、長生き、子孫繁栄、社会的地位と富の獲得に関心が強い。これらの利益がどれくらい獲得できるかは、天によって与えられた宿命と、人間自身の努力、そして人間を取り囲む自然環境によって決まるとされる。

中国人が結婚相手、進学、昇進の難航、住宅・墓場の立地を考える際、占うのはそのためである。宣告された運命を、決してそのまま受け身的に待つのではなく、あの手やこの手を使いマイナスの運を避け、プラスの方向にもつていこうとする、前向きな生きざまがそこに見える。

◎王氏の銅銭占い

中国の古い方法は亀の甲羅を炙ってそのひび割れで予測する夏・商の時代の「卜」、著草を用いて占う周



銅銭を投げる前の依頼者 (撮影・謝景彩)



依頼者の投げた銅銭の陰陽回数を記録する王維隆氏

の時代「筮」が有名だったが、現在、庶民に親しまれているのは、銅銭、人相、生年月日、羅針盤による占い法である。安徽省宿州市に住む王維隆氏は庶民的な占い法に精通する占い師の一人である。王氏に実際に見せてもらった銅銭による占いを紹介する。

依頼者は、まず三枚の銅銭を手に混ぜて、机に六回投げる。花模様のあるのは裏といい、陽を表し、文字のある面は表といい、陰を表す。占い師は下から上へ六回の陰の数を記録する。文字模様が一枚出た場合、「一」と書き、少陰とされ、二枚の場合「二」と書いて少陽という。三枚の「陰」が出た場合、「×」と書いて老陰というが、これは陽に転じる。

王氏は六回の記録を見て、占いの依頼者と占われている当事者などの関係を明らかにし、総合的に判断し、結論を出す。

占いの結果に応じて、依頼者の自宅に符などを飾り、依頼者の置かれている凶方位の凶作用を吉作用に変えていく対策をとるケースもある。

その際に王氏がよくつかうのは「姜太公八卦鎮宅符」である。姜太公とは商朝末期の政治家の姜子牙のことであり、災を払い、邪気を鎮める神とされている。

◎成事在天、謀事在人

今年六二歳の王氏は、一九七四年からなんと独学で『易経』を勉強しはじめた。彼は一九四七年に安徽省北部の農村に生まれ、一五歳のとき大飢饉があり、父が彼の足もとで餓死した。貧しかったが勉強がよくできた彼は特待生として宿州師範大学に入って数学を勉強した。卒業後、

成事在天、謀事在人——事を成功させるのは天であるが、やるかどうかはあなた自身で。この中国のことわざがいうように、人間は、与えられた天命を左右することは不可能であるが、自分たちの工夫や、置かれている環境に手を加えることによって、運命をプラスの方向に転換することができる。これは中国庶民の生きる力だろう。



桃の木と鶏の血でできた姜太公八卦鎮宅符

解放軍に入隊し、三年後に復員して宿州市中国銀行に就職したが、三回昇進のチャンスがあったにもかかわらず、結局うまくいかなかった。

納得がいかなかった彼に、ある年よりの同僚が『易経』という本は人びとの運命を予測し、幸せにしてくれると勧めてくれた。それ以来、三五年間、王氏は、占いの道に専念し、運を予測し、不利な時空を避け、自分にプラスになるように働きかけ、人生を切り開いた。

現在、北京、上海などの大都会からも公務員、軍人、医者、共産党幹部、商人などさまざまな依頼者が彼のもとに殺到している。

成事在天、謀事在人——事を成功させるのは天であるが、やるかどうかはあなた自身で。この中国のことわざがいうように、人間は、与えられた天命を左右することは不可能であるが、自分たちの工夫や、置かれている環境に手を加えることによって、運命をプラスの方向に転換することができる。これは中国庶民の生きる力だろう。

時を経た占い

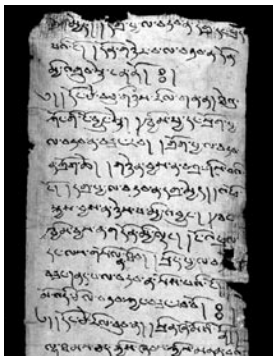
にしだ あい
西田愛

神戸市外国語大学大学院博士課程

イギリス、フランスの国立図書館などに所蔵される古チベット語文献の解読・研究をしている。古文書の語る古代の占いと、現代チベット世界でおこなわれている古い・儀式との複合的な研究を目指す。

二〇世紀初頭にヨーロッパ、日本の各国探検隊が敦煌などから将来した古チベット語文献中には、占いの文書が多数含まれている。代表的なものとして、サイコロ占い、銅銭占い、鳥の声による占い、羊骨占い、夢占い、日時に関する占いなどが挙げられる。

これらすべてに共通して言えることは、文書中に、誰が、いつ、どのように占っていたのかという客観的な情報がほとんど含まれていないこと



銅銭占い文書(国際敦煌プロジェクト(IDP)データベース利用)

とである。そこで、古い文書の前文や奥書、同時代の木簡からの情報さらに周辺地域の占いとを比較をとおしてわかってきたことをいくつか紹介したい。



羊骨占いに使用された羊の肩甲骨(『シルクロード 絹と黄金の道』展図録より転載)

●サイコロ占い

まず、もともと出土点数の多いサイコロ占い文書について。この占いに関する文書は、敦煌からだけではなく、その他のチベット支配地域(トゥルファン、マザルダグ)などからも発見されており、九、一〇世紀のチベット社会で広くおこなわれていた占いであることが窺える。占いは、主に象牙製の細長い棒状のサイコロ(四つ目)を用い、それを三回ふることにより、一・一・一、四・四・四までの六四通りの結果を導きだしていたようである。

サイコロ占い文書の内容をみてみると、まずはサイコロの目の数(二・三・三など)が記され、それ

に続いて神格名または韻文が占いの出所として挙げられる。神格には明らかにチベット固有の神々と考えられるものからインド系の神々まで種々多様な名前が登場する。その後、病氣、結婚、家運、生命運などについての個別の結果が述べられ、最後には大吉から大凶までの総合判断が下されているのである。

この点では、和歌や格言に続いて、個別の吉凶、総合的な吉凶の記された日本のおみくじと似ており、親近感を覚える占いである。これと似た占いとして、一二枚の銅銭を用いておこなう銅銭占いもある。

●羊骨占い

この占いは、チベットだけではなく世界中で古くからおこなわれている占いの一種である。チベットでは西域南道のミールン地域から占いに使われたと思われる羊の肩甲骨が多数出土している。時代的には七九〇(八五〇年頃のもの)であろう。

ほとんどが無地のト骨だが、一点だけ文字が記されたものがある。おそらく占いの効果、呪を強めるために記されたものであったと考えられる。ト骨の中心部は欠損しているが、他の箇所には灼け跡などは見当たらない。おそらく熱した道具を骨の中心部に当て、それによって生じた亀裂の入り方から吉凶を判断したのだろう。

●鳥の声による占い

この占いは方角を九に、時間帯を一〇に区分し、どの方角でどの時刻に鳥の鳴き声を聞いたかによって、なにが起こるかを予言したものである。たとえば、夜明けに南で声を聞けば、馬一頭が手に入る、といった具合である。

ほかに、各方向で不吉な鳴き声を聞いた場合の供養についても記されているのは興味深い。

ここで挙げた古代チベットの占いはすべて、個人が先天的に生まれ持った性質による占い(四柱推命や占星術など)ではなく、その時々々の事象に対処する比較的素朴な占いである。このあたりにチベット人の氣質の一端が垣間見える。



鳥の声占いの文書(IDPデータベース利用)

コーヒーカップの底の「眼」

東地中海アラブ社会の占いと邪視

すがせ あきこ
菅瀬 晶子

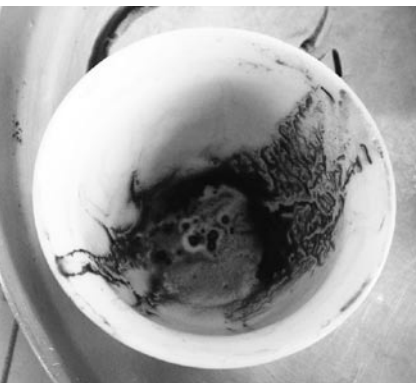
総合研究大学院大学葉山高等研究センター 上級研究員

最近パレスチナ、イスラエルの民間信仰や、ヨルダンの科学施設を調査中。著書に「イスラエルのアラブ人キリスト教徒」(淡水社)など。

かつてオスマン帝国治下にあった東地中海世界において、コーヒーといえはそれはトルコ・コーヒー。つまり細かく挽いたコーヒーをカルダモンとともに水で煮出し、その上澄みを小さなカップでゆつくり味わうものと決まっている。アラブ諸国ではアラブ・コーヒー、ギリシャやキプロスではギリシャ・コーヒーと呼ばれる



今日の運勢は?



コーヒーを飲み終えて、しばらく伏せておくと、このような模様がカップの内側に浮かび上がる。「邪視」がいくつも浮き出ているのが、おわかりだろうか

れているが、基本的には同じものだ。朝、眠い目をこじ開けるための起き抜けの一杯。午後、ひと仕事終えた後の一服。親しい友を歓待するにも、望まぬ客を早々と追い出すにも、コーヒーは欠かせない。そんなアラブ人の生活に密着したコーヒーは、古来占いの道具としても親しまれてきた。

●コーヒー豆の滓が「眼」

飲み終えたカップを盆の上に伏せて、しばらく放置すると、乾いたコーヒー豆の滓がカップの内側にさまざまな模様を描きだす。その模様を絵解きして、その日の運勢を占う

のである。

カップのふちに向かって滓の線がのびて、その先が末広がりになっていたら、「道が開ける」。滓が人道雲のような輪郭を描いていたら、「お金が入る」。幾度も解説してもらったのだが、いまひとつよくわからない。

そんななかで、筆者にもはつきりと判別できるのが、他人から嫉妬を買っていることを示す「邪視」のサインである。コーヒーカップの底にカルダモンの粒が張りついて、そのまわりをコーヒー滓が黒くふちどっているのを見いだすと、彼らは「神様、どうかご加護を」と、神妙な顔で咳くのだ。

●遊びなら許されても……

もともと、一般のアラブ人がおこなうコーヒー占いは、新聞の星占いと同じく、運試し程度のものでしかない。プロの占い師もいるらしいのだが、わざわざ出かけていって鑑定してもらおうという気はないようだ。それどころか、敬虔な一神教徒、つまりムスリムかキリスト教徒である彼らは、むしろそういった本格的な占いを敬遠しさえするのである。その証拠に、占い師から絵解きを習ったりするのかと尋ねると、彼らは「顔をこわばらせ、決まってこう答える。「カイロとかにはいる

よ。でも、このあたりでは知らないね。それに、こうして遊び半分にとやっているぶんには構わないけれど、占いなんてほんとは、神の教えにそむくことだからね!」

●ほんとうに怖い存在は

彼らが占いを恐れる理由は、コーヒーカップの底からこちらをじっと睨む、カルダモンの粒と無関係ではない。嫉妬のまなざしが災いを呼ぶという邪視にまつわる俗信は地中海沿岸全域でみられ、たいいてどこにでも「邪視を発する」という評判の悪い人物がいるが、なかでも占い師の邪視は強力だとされている。それだけではなく、占い師は客の注文に応じて、呪いもおこなうというのだ。折り合いの悪かった姑の死後、その部屋で寝起きするようになった娘が体調を崩し、思い切った呪符がベッドから、占い師が作った呪符がベッドの下から出てきたと、まことしやかに語る者もいる。



コーヒーをわかつ小さな手鍋と、コーヒーカップ

占いに託す願い イランの聖所信仰

しみず なおみ
清水直美

テヘラン大学外国語学部講師

イラン文学に見られる倫理観が本来の研究テーマ。この数年は、聖所信仰に関心をもち、調査している。

なにか新しいことをはじめるとき、進路に迷うとき、未来を知りたいと思うとき。「人を超えたもの」に答えを求めようとする行為に洋の東西はなく、イランでもさまざまな形で見られる。ここでは、イラン各地に見られる人を超えたものに触れ、祈る場である「聖所」に関連した占いをいくつか紹介してみたい。

●聖なる場の特別な力

「聖所」とはイラン各地に見られ、人を超えた存在に関連した神聖な場所であり、そうした存在に対する訴えかけがおこなわれる場所である。病気を治してほしい、失せものを見つけてほしいなどの願掛けの場でもある聖所では、占いをおこなう人びとの姿も見られる。

そのひとつが、願い事を思いながら聖所の壁面にコインやモフル（シー



岩窟の壁面での占いの跡。小石やモフルが多数貼りつけられている(ファールス州セイエド・モハンマド廟)

ア派信徒が礼拝に用いる土製の小さなブロックで、跪拜の際に額が当たるように床に置かれる)、小石などをこすりつけ、指を離してもそれが壁から落ちなかつたら願い事が叶う、というもの。各地で見られるこの占い、とくに決まった呼び名はないらしい。

●さまざまな願いをこめて

人は結婚し、子どもをもつて一人前、とされるイランでは、結婚しても子どもが生まれぬことは女性にとつて大きな問題である。そこで女性たちはいつ子どもが授かるかを知ろうと聖所へ赴き、敷地内の木々に



岩窟には願い事を叶える力をもつとされる人物の墓とそれを覆うケースが置かれている。その奥の壁面でも占いがおこなわれていた(セイエド・モハンマド廟)

ゆりかごの形に布の四隅を結びつけ、その中に短い木の棒や小石を入れていく。それが落ちたときに子どもがでるとされている。

ウルラーマーネ・タフトのピール・シャーリヤール廟の入り口脇にある石の上には、いくつもの小石が置かれている。これをぎつと手に取り、数えてみる。手に取った小石の数が偶数か奇数かで望みが叶うかどうかかわかるという。

占いに使われる小石にしても小枝にしても特別なものではなく、占い自体に名前もない。どこにでもあるものを、人知を超えた存在との交信の場である聖所で使用することに意味があるらしい。

●宗教的な規制と相剋

しかし聖所信仰という、人びとの生活に密接な場所でおこなわれてき



ハンモック状に結ばれた布の中に小枝や小石が置かれている。これが落ちたときに子どもが授かるとされている(コルデスターン州セイエド・エブラーヒム廟)

た占いは、一九七九年の革命後のイスラーム教育のなかで「クルアーン(コーラン)のなかで禁じられているから」、「非科学的な行為であるから」と、聖所の管理者らによって禁止されたり、自然とおこなわれなくなったりしている。こうした傾向は都市部やその周辺部で顕著である。たとえば、テヘラン市北西部の山中にあるエマームザーデ・ダーウードでは、参詣者がコインによる占いを盛んにおこなっていた。しかし五、六年前に廟の管理事務所により占いが禁止され、その後、廟内の拡張を口実に、占いに使われていた壁も撤去されてしまった。

一種のイスラーム・グローバリズムとも言えるが、不安を解消するための人びとのささやかな行為を規制する動きは少々寂しくも感じられる。

神聖暦に運勢をよむ

マヤのチツテー豆占い

うもと まさひろ
羽幹昌弘
写真家

写真展「大地礼讃」、ある古都の「世紀」、「マリア・マリア」、「神の庭」などを開催。二〇一二年二月二日、マヤの長期暦が終わる。次はどのような時代がくるのかに関心がある。

それは一枚の印刷物がはじまりだった。ある町で街頭写真師と話し込んでいた時に渡されたものは、マヤの神聖暦ツオルキンに応じた誕生日を祝う儀式への招待状だった。一九八〇年代初頭にカルロス・カスタネダ(ニューエイジの人びとに多大な影響を与えたアメリカの文化人類学者)の著作に接し、呪術師の

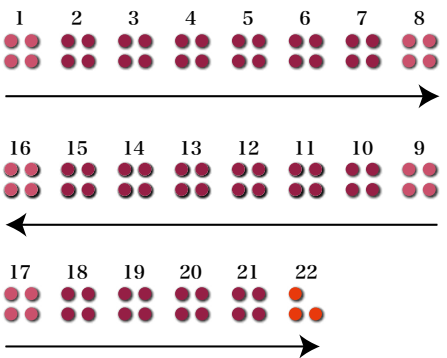
精神世界を知りたいと思っていたが、なんと、その写真師が呪術師だった。誕生日の儀式に参加して、興味をいだいた私は、今後も儀式に参加させてくれるようお願いし、マヤの占いに出合うのである。

●神話にもある古来の占い

グアテマラの占いには、ツオルキンという神聖暦(一三の数と、雨・イヌ・サルといった名前のついた二〇の日を組合せ、二六〇日を一周期とする暦)に従った誕生日によって、持つて生まれた性格と一生の運勢・宿命を判断するものと、チツテー豆を使用し、近未来の金運・恋愛運・家庭運などを占うものがある。

他に水晶占いもある。これは水晶の割れ目の色を見て、緑色に見えた時は物事が成就しない、紫色に見えたならば家・土地・金・仕事が良い方向に向かう、灰色に見えたら死・敵と出会うだろう、などと占う。

私が手解きを受けたチツテー豆占いは、マヤキチエ族の神話「ポップ・ウーフ」に記載されている古来のものである。この占いは、呪術師によって占い方の違いはあるが、基本的には、神聖暦ツオルキンを使用し吉凶



神聖暦の日のあてはめ方例



チツテー豆占いをしているところ。豆の数、並べ方など、その方法は占い師によってさまざま

の徴候を読みとり、未来を占う。テーブルに広げた布の上で二六〇個の豆を左回しにかきませながら、マヤの神々の名を称えチツテー豆の精霊に正確な占いができるようお願いし、豆を一掴み握り二つに分ける。握ったほうの豆を四粒を一組とし、

右に横一列に並べ八組作る。二列目も同じようにし、おおむね三列でき。最後の組の豆の数は四粒または三・二・一粒となるが、この最後の豆の組が最も重要なサインで、豆が偶数であれば吉、奇数ならば凶と判断する。

●占いの結果が最悪であれば

占いをする当日が神聖暦の何の日にあたるかをまず調べ、第一列目の最初の組にその日をあてはめる。

例えば当日が、

「二の雨」ならば、右へ順に「二のイヌ」「三のサル」とあてはめていき、図のように、二列目は右から左に、三列目は左から右にすすみ、各列の端の組にあたった神聖暦の日の意味を読む。

この読み方は「巳」の形となり蛇を表す。マヤの神ククルカン(羽毛の蛇)のことだろうか？

占いの結果が最悪な場合は、依頼者が必要と思えば、呪術師に儀式をお願いし、良い方向へ導かれるよう祈る。



呪術師のイニシエーションの祈り